

# 風のように

甘木教会



主任牧師：崔大凡

牧会委嘱牧師：竹田孝一

「『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。」 マタイ9：13

## 【説教要旨】

『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。

この言葉は、他の福音書になく、マタイ福音書だけにある言葉です。この言葉は愛の預言者ホセアの「私が喜ぶのは慈しみであって、いけにえではない」という言葉からの引用です。

収税人、罪人と一緒に食事をもよなさせるイエスの行為は、ファリサイ人にとって許せない行為でした。

イエスさまは、その収税人マタイをイエスの弟子とします。「わたしに従いなさい」と。

ファリサイ人にとって、イエスが収税人、罪人と一緒に食事するかとイエスさまに問うのです。

この問いに「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」であると答えられるのです。それは、預言者ホセアが「私が喜ぶのは慈しみであって、いけにえではない」という「私」、「神」が望まれていることだと答えます

「わたしに従いなさい」とは、神の憐れみのうちに自分を委ねなさいということです。イエスに従うということは、神の憐れみの中を生きなさいということです。

後半の「行って学びなさい。」ということは、今という場から立ち上がって違うところ、すなわち神の憐れみの中に自分を委ねるということです。

世界は時々刻々と大きく変化していっています。そして人間はこの大きな変化の中で着実に大きな知識、知恵、力を得ているように思えます。この人間の大きな力の中で自分の平和、繁栄を基礎付けていこうと増々しています。この場から立ち上がって別の場所、神の憐れみの中を生きるということです。

マタイが、「**わたしに従いなさい**」と言われた。**彼は立ち上がってイエスに従った。**」とありますように、私たちが安住させている、座っている場所から立ち上がって神の憐れみのうちに生きることこそ、私たちに勇気づけることはないのです。

マタイにとって、徴税人という職業は、差別をされようが、生活の安定をもたらす場所でありました。しかし、どこか心に大きな穴が開いていた。埋められない空虚感で、自分の今の場所から立てられないでいたのです。ため息が聞こえてきます。

「イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、」と記されていますように、罪の只中にある**収税所**で、マタイを招くのです。罪の中にいるマタイを見られたのです。見たのです。「マタイという人が収税所に座っている」のを。罪の中に一神の憐れみに生きることができないで、座り込み一歩も前に出ようとしていないマタイを見つけたのです。

そして、ペテロと他の弟子たち同様に「わたしに従いなさい」と招かれるのです。あなたは罪の中にいる人ではない、「わたしーイエス」、つまり愛に、憐れみに満ち溢れた他ならぬイエス・キリストの中に生きる人であるということです。

憐れみの外、罪の床にいるマタイをいま取り上げてイエスの、愛の、憐れみのうちに歩みだす恵みの言葉を語りかけてくださるのです。

「わたしに従いなさい」は、まさに神の憐れみの言葉であり、愛の言葉です。

同じように弟子たちに「誰でもわたしに従って来たいと思うなら自分を捨てて、自分の十字架を負って、わたしに従ってきな

さい」という言葉があります。「自分を捨てる」ということは、神の憐れみを知って、自分をもはや、自分を空とするということです。空、何もないゆえに自分の中に降り注ぐ神の憐れみだけが見えてくるのです。自分を捨てる、空ゆえに私たちの歩む困難さの課題に押し潰されることなく、キリストの降り注ぐ憐れみ、愛としっかりと結びつけられていくのです。

「イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。」。徴税人、罪人と食事をもにすることとはやはりイエスさまの時代の律法からすれば決して許されない行為でした。イエスはあえてなされた。なぜなら、イエスは、罪ゆえに排除されることをお許しになられないこれが神のみ心なのです。私たちはこの神の憐れみ、愛の恵みをいただいているのです。この神の憐れみを生きることこそ私たちなのです。

時代は激しく動いています。この動きの中で今こそ、安住を求めて生きようとしみます。この世の大きな知識、力のところで私たちは立ち止まりますが、私たちは、この時代の只中に、真に自分を支えられるものはなんであるかを今、一度私たちに示されたイエスのお言葉を聞きます。それは神の憐れみのうちに従うことを。このことを行って学ぶことこそ今の時代にとって大切なことはないのです。

アユシュビッツを生きた心理学者の فرانクル は、「このような苦悩の後には、この世界の何にも一神以外には一決して恐れる必要はない。」と言っています。極限のなかで彼は生きる根源の力は、「神以外」という神への絶対服従だということ、歴史の行いの中で、そして学びました。

イエスが「私に従いなさい」という神の憐れみうちに生きることこそ、新しい希望に満ち満ちたものとなりえるのです。パウロは「わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。」と言います。私たちの誇るべきところは、真実なものは、私たちに示してくださった神の憐れみです。

# 牧師室の小窓からのぞいてみると

## エゴとの戦い



今年も地球が温暖化による自然界の変化が起きて、私たちの世界を脅かしている。地球そのものが危機に瀕していることは誰でも分かっています。

だからこそ世界が集まり地球温暖化対策のルールをパリ協定で決めたが、トランプ大統領になって、アメリカは再度、協定から離脱しました。それは自国を優先という国家エゴをまるだしにした蛮行です。この行為が自国の首を絞めることになるこんな単純なことが分らないはずはないがありません。しかし、人間は悲しいことに、自分のエゴを最優先にしてします修正、アダムとイブの禁断の知恵の実を食べて以来の誘惑に勝てない、つまりエゴに勝てない罪人であるということです。フランス革命以降、神を抜きにして人間を軸として歩き始めた人類は、近年、エゴが強くなってきて、地球の終わりが真実味をおびてくるここまで来たのです。

だから、私たちキリスト者は、神の前でエゴを空としていく宣教をしていく、時代に生き、エゴとの戦いであると思います。

# 新米園長・瞑想？迷走記

## 一裸足ー



日善幼稚園は、裸足で、一日を暮らす。今日も未就園児のRちゃんが裸足で外にも飛び出して、嬉々として遊んでいる。

今の時代、足に砂がつくざらざらする感触をいやがる子どもが多いと聞く。私も実は小さいとき極度に砂が足にふれるざらざら感をきらっていたことを思い出す。

が、成長にはかせないことだと日善幼稚園では裸足で遊ばせることによって、子どもたちが、足の裏で土の感触を感じながら、心の癒しを得ている。

足の裏で直に土に触れることに何かの力が体に入ってきていると思う。

今の時代、直接、土に触れる機会が、少なくなっている。土ひとつ触れるのにも靴という文明が介在している。これから工夫をしていき、直接に土触れさせ、心強い、健康な子どもの成長を助けていきたいと思っている。

## 毎日の糧



聖書：「イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。

マタイ9：9



### ルターの言葉から

イエスが、さげすまれている者や罪人を使徒に選ばれたことには、とても大きな慰めを与えられる。それは、彼らが高い任務のために傲慢にならないように、また罪人の誰もが、キリストに不信を抱いたり、絶望したりすることのないためであった。

しかし、今、聖堂の最も高い位置に、また聖徒の集会の最も奥に座っているのは、いったい誰であろうか。まさしくそれは、途方もない大罪人であり、徴税人であり、自分たちの「義」によって、地獄のまん中に座るのがちょうどよいはずの者たちである。このようなわけだから、たとえ私が罪人であるのにしても、ペテロには、私を侮ったり、私に対して自分を誇ることの出来ない根拠はない。なぜなら彼には過去に遡って考える理由があるからである。すなわち彼は罪人の仲間であったし、大きな罪を犯してもいたのだから。

宗教改革の背景があるように思える。ここでいうペテロは、ペテロ座を受け継ぐ、ローマ法王を指すのではないだろうか。「自分たちの「義」によって、地獄のまん中に座るのがちょうどよいはずの者たちである。」と言い切ってしまうルターの過激な言葉は、ルターが生きた時代にとって必要なことだったのかもしれない。

「自分たちの義」、自分の義しさだけ強調してやまない当時の宗教世界にあって、我らこそ罪の頭と、神の憐れみになしには生きていくことが出来ないという、「真実の義」とルターは私たちに目をむけさせた。

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」マタイ9：13

祈り：常に謙虚の心をもって歩めますように。アーメン。

## 甘木通信

愛する妻と共に人生を見つめよ 空である人生のすべての日々を。それは、太陽の下、空であるすべての日々に 神があなたに与えたものである。それは、太陽の下でなされる労苦によって あなたが人生で受ける分である。 コレト9：9



「空」を「束の間」と小友先生は訳し、解釈している。

「愛する妻と共に人生を見つめよ 空（束の間）である人生のすべての日々を。」

独身の28年間、結婚して45年間、二人で歩んで来た時間の方が長く、長くなった。妻は元気そうであっても、私の定年間近なとき、腰の痛みから入院し、病院に連れて行くのに往生した。九州に来て、使い過ぎた手の痛みが出て、手術をしたりしている。去年は、私が大病をするが幸い入院・手術もせずに寝込まずに妻にさほどの負担をかけなかった。しかし、今、少しずつ単語が私は出なくなった。認知も起き始めている。二人のどちらかが介護される時もくる。この時間も神さまの目からすると束の間のひと時に過ぎないという。長く、永遠に続くのではない束の間であるのだからすぐに過ぎ去っていくことだというのであるが・・・。

言うのは易し、実際はとなるが、「空」、つまり「束の間」と受け止めると「束の間」だから重荷を負えと、負えると反転するのではないかと思ひ帰ることができるだけでも支えとなる。何を恐れるか「空」であり「束の間」なんだよと。慰めと励ましの言葉が聞こえてくる。

(甘木日記)土) 日善幼稚園の「入園説明会」。一 가족が来て下さる。入園につながることを祈る。刺すような日差しを避けて、夕刻から甘木教会へ。日) 刺す陽射しの中を礼拝に集う。一人でないみんなと宣教をしていると感じる。病床訪問。月) 折角の休みも、日善幼稚園で運営会議。バスの運転手さんと安全運転について話し合い。火) 労務処理、募金事務、理事会資料点検。楽しいといえば楽しい。水) 幼稚園を学法化するために一歩、踏み出す。木) 松崎保育園に。金子先生の「愛のかたち」という本に魅惑され電車を乗り越しそうになる。久しぶりに金屋食堂へ。金) Kさんに報告書のイラスト作っていただく。若い人の時代。感謝。

**おまけ・牧師のぐち**（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。はぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）今日は「第1回入園説明会」で幼稚園に行く。早く行き、掃除、水遣り、苗の植え替えと思い巡らして行くと、水も掃除もされている。休みの主任が来てしてくれていた。ありがたい。時間が十分取れて苗の植え替えが出来た。また教会を訪ねて来られた東京・白山教会の信徒さん、オルガニストら、花生けに来られていた信徒さんとお会う。しかし、だれも説明会には来られないか



と思うと一家族が来られる。人が私の思いを超えて来られた。事務作業を終えて帰宅。日差しが強すぎて、陽射しがおさまるころに甘木教会へ。

日）陽射しの弱い早朝に起きて、庭の手入れ。赤紫蘇を移植。ザクロの花が今年は多く付いている。礼拝後、ゆっくりとお茶の会、午後から病床訪問と聖餐式。宣教したいことが多くあるが、一人では出来ない。そんな時、緑のカーテンを教会堂に着けたいと言うとすぐに応えて下さり、もしかしらら教区のキャンプが当教会になるかもしれないと話すも協力とアイデアをくださる。一人でない喜び。月）休みだが、幼稚園で教会の責任者と協議、運転手さんと運転、運行の話し合い。保育の週案のチェック。幼

少連携の資料作り。休みが飛んでします。事務処理など自分が思うようにいかない老いがある。家まで車でSさんが送ってくれる。Sさんは中学生の時分から知っていた。時間の多さを感じる。帰って夕食をして、床に服を着たままバタンキュー。メールチェックも忘れず。火）日善幼稚園職員の労務、募金の事務。羽村幼稚園理事会の準備ためズーム会議。昨日同じで、帰って床に服を着たままバタンキュー。気づくと二時。自分でこれって73歳の方がやること呟く。パウロは目標を目指して走れと言う。目標、みんなが幸せになることか。事務一つにしてもみんなが幸せになることの一つと思いません。水）早朝から事務作業を家でする。学法を取るための準備。何をしても今日も疲れる。木）早朝、日善幼稚園の事務処理をして、

松崎保育園、甘木教会へ。家内は友の会で、私一人で、出かけたので、何か不思議な感じである。雨が降り、九州北部は梅雨入り、雨の合間に植物の移植のとき。まずは、甘木から赤紫蘇を久留米に、久留米から青紫蘇を甘木へ。楽しくなりそう。金）赤紫蘇を久留米の花壇に植える。バックは青紫蘇です。色々と書類作りに追われる。デザインを折角パワーポイントで送ってくださり使い易くして下さったのにワードと勘違い。こういうことが多い。

